

「超音波医学」への日本語論文投稿の勧め

金 井 浩

最近、至るところで「英語で論文を書くよう」に強く勧められる。世の中もグローバル化の波に乗って「英語でないと論文でない」風潮がある。この意見には一理あるが、短所もある。その短所を補完するように、元々の「日本語の論文誌」も存在する。本稿では、それらを整理し「日本語による論文投稿の効用」を述べてみる。

まず「英文誌への投稿の利点」は、

『優れた論文であれば、世界的に広く読んで貰うことができ、同時にインパクトファクタ等によって評価を受けることができ、自分自身の業績にも繋がる』という点に尽きる。ただ、こうした論文はごく一部である上、一般に紙面の都合から、詳細に長く書くことはできない。

一方、「英文誌への投稿の短所」としては以下の点が考えられる。

- (1) インパクトファクタの高い学会誌・雑誌に投稿すると、一般に厳しい審査を受ける。ひどい場合には、本文の査読を受ける前に、題名とアブストラクトだけの判断から reject され、その理由も不明で次に何を修正すれば良いかの情報も得られぬまま、時間を無駄に費やしたことになる。
- (2) 英語の学会誌や雑誌に投稿する場合、①研究内容・原理・実験・考察など「論文の論理展開の組み立て」と、②「英語の校正」の両方に十分な能力が必要であるが、これらの能力を付ける訓練過程にある初心者の研究者は、その研究者を指導する立場にある同じグループの経験豊かな研究者から仔細にわたり添削を受け、真っ赤になった添削結果を受け取る。問題はその後である。赤字で指摘された部分をワープロで修正して投稿原稿を用意する際に、①「論文の論理

展開」を指摘されたのか、②「英語の記述」を修正されたのか、各々の個所をきちんと認識して、その赤字修正の背後を考え、次に繋げられるよう、吸収できるかである。単なるタイピストになって修正した論文が、幸か不幸か査読に1回でパスすると、その若い研究者は、実力も付かなかった上、「英文論文の投稿はこんなものか」と勘違いをするかもしれない。上記①・②の能力を付ける訓練を、同時に達成するのはかなり厳しい。若いときにタイピストで学習しなかった研究者は、将来一人で研究論文を纏めなければならなくなった立場になって初めて、実力が十分付いていないと実感するのだろう。良く考えてみれば、現在50歳代半ば以上の研究者は、「グローバル化」という言葉もまだない環境で研究者を目指したので、最初は、日本語論文の執筆を通して①の訓練を行い、次の段階で必要に迫られて②の訓練を行ったと拝察する。時代が違うとはいえ、①・②を同時に行うのは、相当大変なことといえる。

- (3) 英語論文を、分野領域の少し異なる日本人研究者に読んで頂くのは、専門用語などの面で容易ではない。日本人には英語の斜め読みが難しく、毎月手元に来る論文全てを読むには時間と覚悟が必要である。結局、題目や所属だけみて、今の自分にとって興味があり役立ちそうな英語論文だけを読むことになってしまい、一人の研究者の「研究の幅が広がる」ことはあまり期待できない。
- (4) これだけ多くの学会誌や雑誌が毎月発行され、各々の学会誌には沢山の論文が掲載されている中で、英語圏の研究者も、いったいどの程度熱心に論文を読んでいるかは不明である。まして英語論文が一流誌に掲載されても、引用される

Recommendation of submission of a Japanese paper to "Medical Ultrasound"

編集委員長、東北大学大学院工学研究科電子工学専攻／大学院医工学研究科医工学専攻

Hiroshi KANAI, Editor-in-Chief, Tohoku University, Graduate Schools of Engineering and Biomedical Engineering, Miyagi, Japan

ことまでは期待できない。発行時に読まれなくても、検索で引っかければ良いが、検索しても沢山の論文が該当すると、自分の論文が、外国人（特にアングロサクソン系）に引用されることは、やはりあまり期待できない。

一方、「和文誌への投稿の効用」は、上記の短所の裏返しとして、次のように整理される。

（もちろん非日本語圏の外国人には読まれないだろうが）日本人研究者の多くには、読んで貰える可能性は高い。日本人であれば、多少研究領域が異なる研究者であっても、斜め読みや図面に興味があるか眺め、さらにそこに面白さがあれば、詳しく読んで頂くことができる。これによって、多くの日本人研究者の「研究の幅の広がり」も期待できる。

若い日本人の研究者の皆さんは、単に英語論文の掲載数を稼ぐという短期間の目的よりも、①「論文の構成・論理的展開を自ら考える能力」と、②「英語で論文を執筆する能力」、の両方の能力を付ける

ことが肝心である。もし、①と②のどちらが重要かと問われれば、日頃の研究や実験などにも影響がある①の方が重要なのである。「急がば回れ」である。②の英語で論文を書く能力は、①に比較すれば「単なる道具」と考えることもできるし、お金を掛ければ達成できる。将来、外国の研究者と伍して戦うことのできる、素晴らしい成果を挙げ続ける研究者になるには、是非、まずは日本語の論文への投稿を視野に入れて頂きたいと思う。

1990年代後半から始まったインパクトファクタ等による評価も、論文の中身の評価の定量化が容易ではないから、いまは優位であるが、学術の世界では過渡的なものであろう。研究者は、「自分自身の力で研究を進め、その結果得られた優れた成果を論文として纏める能力」が問われるのであって、それが短期間で引用されなくとも、「優れた成果として後世に残す能力」が重要である。こうした能力を、丁寧に、しっかりと、付けていって頂きたいと思う。そのため「超音波医学」への和文論文の投稿を大いにご活用頂きたい。